The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	極東ロシアにおける日本研究と日本語教育の行方 ：東洋学院(1899-1920) の日本学を中心に
Author(s)	ディボフスキー, A.
Citation	言語文化研究. 2009, 35, p. 95-117
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11631
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

極東ロシアにおける日本研究と日本語教育の行方

－東洋学院（1899－1920）の日本学を中心に－

A.ディボフスキー
（Alexander Dybovski）

This paper highlights the developmental problems of Japanology in the Oriental Institute (1899-1920) in Vladivostok. Unfortunately, the role of the institute in the history of Russian Japanology appears to have been underestimated. This paper argues that the Oriental Institute has made significant contributions to the development of Japanological studies in Russia. Professor E. G. Spalvin, who was in charge of Japanese-Chinese Department, and his colleagues succeeded in the creation of a unique system of Japanese language teaching, and powerfully influenced the production of Japanese teaching materials in Russia and the former Soviet Union.

キーワード：日本学史、日本語教育史、東洋学院、ウラジオストク、E.G.スパルヴィン

ロシアにおける日本語教育は、1705年にサンクトペテルブルグで始まった[1)]。しかし北京条約（1860）後の19世紀後半から開拓されはじめた、日本にもっとも近いロシア極東地域南部で日本学が開始されたのは19世紀末、北東アジアにおけるロシア帝国の拠点として建設された、ウラジオストクでのことである。1899年10月21日、東シベリアと極東ロシアにおける最初の大学である東洋学院が、ウラジオストクに設立されたのだ。

東洋学院に関する先行研究は、存在するが[2)]、モスクワとサンクトペテルブルグにおけ

1）詳細は、以下を参照。ヴィクター・ルィービン（Victor Ribyn）「サンクト・ペテルブルグ（ロシア）における日本語学習と日本研究の300年のあゆみ」（研究ノート）『日本研究』2006年、第32号、pp. 261-284.

2）Серов В.М. «Становление Восточного института (1899-1909)», Известия Восточного института Дальнев. гос. ун-та. 1994, № 1. С. 14-36; Дальневосточный государственный университет. История и современность. Владивосток, 1999. С. 6-112; Кочешков Н.В. Восточный институт во Владивостоке (1899-1920 годы) и его профессора / Учебное пособие. Владивосток, 1999; Григорцевич С.С. Из истории отечественного востоковедения (Владивостокский Восточный институт в 1899-1916 гг.). Советское востоковедение. 1957. С. 130-139; Алпатов В.М. Изучение японского языка в России и СССР. М.: Наука, 1988. С. 29-34; 高野明「東洋学院（浦塩斯徳）における日本研究について」『日本歴史』日本歴史学会編、1954年、10（77）号、pp. 53-57; 高野明「東洋学院刊日本関係文献目録」『日本歴史』日本歴史学会編、1954年、12（79）号、pp. 52-57. 上記先行研究のうち、日本語で刊行された著作についていえば、アルパートフは言語理論の発達を、高野明は東洋学院についての客観的データ（学生や教員名簿、カリキュラムや講義の中身、日本関係文献リストなど）を中心に紹介している。本論文では、これらの日本語論文と内容が重複しないようにしている。また、E.V.エルマコーヴァ、生田美智子など、特に1994年から極東国立大学で発行されている『東洋学院通報』に多くの論文を発表しているが、ここでは省略する。

る日本語教育、日本研究施設に関する研究と比較してその数が少なく、その歴史にも不明な点が多い。そのためロシアの日本語教育発展における東洋学院の意義と役割は、現在まで十分に究明されておらず、20世紀初頭にロシアの日本学をリードしたE.G.スパルヴィンをはじめとする日本学者の活動も、十分に評価されてきたとは言えない[3)]。本論文は、東洋学院の歴史を概観し、東洋学院における日本語教育と日本研究に焦点をあて、その教員、学生、聴講生の主な著作を分析することで、ロシアにおける日本学への東洋学院の寄与を評価することを目的とする。

ロシアにおける東洋学の中で、日本学はかなり遅い時期に初められた分野である。19世紀には、V.M.ゴロヴニンの『日本幽囚記』(1816) とI.A.ゴンチャロフの『フリゲート艦パルラダ号』(1855-1857) のような記録文学作品があったものの、20世紀までは、ロシアでの日本についての科学的な知識は、主に西ヨーロッパの文献から得られた情報によるものであった。サンクトペテルブルグ大学の東洋学部では1870年ごろから、在露日本公使によって中国・満州・モンゴル科の選択科目として日本語が教えられるようになった[4)]。1888年からは黒野義文によって書道が導入され、『日本通俗会話篇』など10点ほどの日本語教材も作られて、教授法が改善された[5)]。しかし依然として独立した日本語講座はなく、日本語は二次的な科目とされていた。

これに対してウラジオストクの東洋学院は、そもそも、東アジアにおける「ロシアの事業」(A.M.ポズドネエフ) [6)] を推進し、極東ロシアの諸地域と隣接諸国において行政・産業・通商の各分野で活躍できる人材を養成することを使命として設立されたので[7)]、当然ながら実用的な日本語学習が教育の中心に据えられることになった。

Ⅰ. 東洋学院設立の経緯とその運命

東洋学院を設立するアイデアは、帝政ロシアの極東政策と密接に結びついていた。19世紀末、日清戦争で勝利した日本は国際舞台に進出し、列強の関心が東アジアに集中してきた。ロシア帝国は、日本を東アジアでの競争相手とみなし、自らの地政学的な地位を強化するために、1896年に露清軍事協定を結んだ。これにより、遼東半島（旅順港、大連）にはロシア艦隊の基地が建造され、露清銀行が設立された。また満州では、東清鉄道を建設

3) ただし最近、特にスパルヴィンについての論文が増加している。藤本和貴夫「日露関係とロシア極東における日本研究ーエヴゲニー・スパルヴィンを中心にー」『日本をめぐる国際関係と言語文化交流史の史的研究』大阪、1999年、pp. 7-16; Икута М. Е.Г. Спальвин в Японии // Известия Восточного института Дальнев. гос. ун-та. 2001, № 6. С. 28-34; Ермакова Э.В. Подготовка японистов в Восточном институте. Известия Восточного института Дальнев. гос. ун-та. 2003, № 7. С. 7-17; Дыбовский А.С.（編者）Первый профессиональный японовед России. Владивосток, 2007. 186 с. ; Посадсков А. Неизвестный Е.Г. Спальвин: Советский период в судьбе ученого и загадка исчезновения его библиотеки// Печатный двор – Дальний Восток. 2007, № 7. С. 10-17など。

4) Бабинцев А.А. Из истории русского японоведения // Японская филология. М.: Высшая школа. 1968. С. 124-137.

5) ヴィクター・ルィービン、同上、pp. 267-268.

6) Основание Восточного института и торжественный акт его открытия. Известия Восточного института. Т. I. Владивосток, 1900. С. 69.

7) Известия Восточного института. Т. I. Владивосток, 1900. С. 81.

する計画が立てられた。このような状況のなかで、極東ロシアの行政機関や産業・商業界、そして極東駐留ロシア軍は、中国語、日本語、朝鮮語、満州語、モンゴル語など東アジアの諸言語を習得し、また各国の政治、法律、地理、歴史、文化、日常生活などに通じた専門家を必要としていた。しかし当時のロシア帝国には、このような知識を学習者に提供できる教育機関は存在しなかった。

ロシアにおける東洋学は、西洋学やスラヴ学に比べて比較的遅く発達した。しかもその関心は、当該国の現状を究明するというよりは、古典書の翻訳や解釈など、主に文献学的研究に集中していた[8)]。たとえば、18世紀末からロシアの中国学の中心となったサンクトペテルブルグ大学では、学習者の会話能力養成に重点がおかれていなかった。そのためここでは、1910年代になってもまだ卒業生の実用的な中国語能力が不足しており、卒業生自身やその就職先からは、現代中国語の読み書きができないという苦情が寄せられていたほどだった[9)]。こうした状況下にあって、東洋学院の創設者たちは数々の難問を解かざるを得なかったわけである。

1880年代、海軍省からロシア極東に東洋語通訳学校を作るようにとの要請があった。これを受けて、19世紀後半に急成長した日本海に面する港町ウラジオストクで中国語教育を実施する案が出され、1895年には同市の男子ギムナジウムに中国語クラスが設立されて東洋語教育が開始された。その３年後の1898年には、Ｓ.Yu.ヴィッテを含む、大蔵省、文部省の要人らによる特別国家委員会によって、東洋学院設立構想とその規約が策定された。1899年5月24日、東洋学院設立案は、ロシア皇帝ニコライ２世の勅令により実行に移され、モンゴル語とカルムィク語の博士であり、第５等文官であったサンクトペテルブルグ大学教授A.M.ポズドネエフが東洋学院の初代院長に任命された。

1899年の夏、A.M.ポズドネエフはハバロフスクに置かれていたアムール州総督官邸を表敬訪問をした後、赴任地のウラジオストクに到着した。当時のウラジオストクは、数千人の中国人、日本人や朝鮮人などが定住し、極東ロシアの国際都市として発展していた。1899年10月21日の設立式には、アムール州総督Ｎ.I.グロデーコフ、ウラジオストク主教エフセーヴィイ、太平洋艦隊司令官Y.A.ギルデブラント、アムール州教育施設監視官V.P.マルガリートフをはじめとする、ウラジオストクの名誉市民、著名人などが多数参列し、ロシア各地からも祝電が寄せられた。開校式では、感謝の礼拝式が行われた後、国家評議会の決定が読みあげられ、V.P.マルガリートフ、法律学準教授N.P.タベリオ、院長のA.M.ポズドネエフなどが演説をした。V.P.マルガリートフは、ロシアにおける東洋学、とりわけ日本学の変遷を明らかにし、N.P.タベリオは、東洋学院設立の歴史を検討し、A.M.ポズドネエフは東洋学院の役割と課題、教育方針などに言及した。

東洋学院は正に、ロシアの大学教育において新しいタイプの教育機関となった。東洋学院規約の第一条では、同学院の使命が次のように定義されていた。「東洋学院は、極東ロ

8）История отечественного востоковедения до середины XIX века. М.: Наука, 1990. С. 371.
9）Скачков П.Е. Очерки русского китаеведения. М.: Наука, 1977. С. 267.

シアとそれに隣接する諸国において、行政、商業、産業施設で働く人材を養成する目的を持つ教育機関である」[10]。このように東洋学院は、ロシア帝国の北東アジア政策を推進し、極東におけるロシア隣接諸国で活躍できる人材を育成するために設立されたが、それと同時に、東アジア諸国に関する学術研究を実践する機関としても発展していくのである。

東洋学院の規約によると、同学院の第一義的課題は、学習者に実用的な知識を与えることにある。そのため東洋学院の教育及び学術的カリキュラムは、この課題の実現に向けて作成されており、学術研究でも通時的研究より共時的研究に重点がおかれていた。東洋学院の教育職のスタッフは、1900年に13人、1910年に23人（神学教師1人、教授2人、準教授５人、教師２人、新言語（英語、フランス語）講師３人、東洋語講師10人）いたが、そのなかにはA.M.ポズドネエフを筆頭に、D.M.ポズドネエフ、A.V.ルダコーフ、P.P.シュミット、E.G.スパルヴィン、H.V.キューネル、G.V.ポドスターヴィンなど、サンクトペテルブルグ大学の有能な卒業生が多く含まれていた。

東洋学院は職員が少なかったにも拘らず、1900年からは紀要『東洋学院通報』を刊行して、東洋語の教材や極東隣接諸国に関する研究資料を掲載してきた。この機関紙は刊行後間もなく、東洋学院のドイツの代理人であったOtto Harrassowitzによってヨーロッパやアメリカでも販売されるようになった。また、学院では短期間のうちに東洋学関連の蔵書を誇るユニークな図書館が作られ、1907年には７つの東洋語の文字で文献を印刷できる出版所もできた。1900－1904年には100以上の東洋や西欧の新聞からの資料に基づいて東アジアの事情を紹介する旬報『現代極東年代記』が出版されていた。こうして東洋学院は、短期間で有力な東洋学研究教育機関になったのである。

東洋学院では、大衆的な教育を行ったわけではない。学生・聴講生数は、設立翌年の1900年には35人（学生23、将校4名、将校外聴講生９人）であったが、1910年には166人（学生86、将校71名、将校外聴講生９人）となり、1913年のピーク時に171人となった後は、1915年には142人に減少している。1903年5月10日に行われた初の卒業式では、卒業生は10人であったが、1899－1909年の10年間では合計142人が卒業した。またこのうち日本・中国科の卒業生は、学生13人、将校11人であった。

このようにして、東洋学院はロシア帝国の極東政策の実施に参画できる人材を養成する教育機関になり、ロシア隣国の総合研究センターにもなっていった。この東洋学院において将来の実業家や外交官、通訳や研究者、行政機関や国民教育の担い手が育てられていたわけである。東洋学院の入学者には、神学大学卒業生、旧帝国技術専門学校や古典ギムナジウムの卒業生、商業・技術・農業大学や師範学校の卒業生がいた。

極東ロシアの隣国の言葉を身につけ、その事情に詳しいスタッフは、極東駐留ロシア軍にも必要不可欠の存在であった。東洋学院設立時から、その聴講生の一部は、アムール州軍事管区や中国駐留ロシア軍などの将校達であった。東洋学院の規約にはロシア軍将校が聴講生となる可能性が明記されていたが[11]、1903年12月６日にA.N.クロパトキン軍相の特

10）Известия Восточного института. T. I. C. 81.

別命令が発行されると、将校は入試なしで入学が許可され、アムール州軍管区司令官が指定する科目すなわち中国語、日本語、朝鮮語、満州語、モンゴル語、英語、フランス語などを学び、東洋学院学生同等の試験を受けることになっていた。1904-1905年度には、東洋学院の聴講生には20人もの将校がいたが、それは年間入学予定学生数（25ー30人）に近いものであった。学生と将校との紛争のため、1909-1910年度からはアムール州軍管区東洋語通訳準備校が設立された[12)]。東洋学院には軍人が大勢いたことにより、院内の規律がさらに厳しくなり、自由思想が抑えられ、士官学校のような雰囲気もあった。1900年の夏から、毎年東洋学院の学生の３分の１程度は国費で専攻言語の国へ派遣され、現地で教育研究活動に従事したが、将校達は国の軍事予算で全員派遣されていた。

日露戦争の時には、東洋学院の学生が40人以上通訳としてロシア軍に派遣され[13)]、東洋学院自体も1905年の2月に、バイカル湖付近のヴェルフネウディンスク（現在のウラン・ウデ）に疎開し、同年10月にウラジオストクに帰還するまでそこで活動を行っていた。

東洋学院の教育活動は、1917年のロシア革命時にも継続された。また1918-1919年には東洋学院の校舎を利用して３つの私立大学（歴史・文献大学、工業大学、法律大学）が創設された。1920年の4月17日には、沿海州政府の決定で、東洋学院と上記の大学が統合されて（工業大学からは経済学部のみ）、３学部（東洋学部、歴史・文献学部、社会科学学部）からなる国立極東大学が設立された[14)]。こうして東洋学院は、国立極東大学の中の東洋学部になり、1939年に閉鎖されるまでその教育と研究の伝統を守り続けたが、国立極東大学の設立と共にロシア極東における東洋学史の第一期が閉幕した[15)]。

このように、東洋学院は僅かに20年間ほどの歴史しか持たなかったが、教員たちの努力によって実践的教育と学術活動を結合させることに成功し、設立されてから十数年で世界的な東洋学研究機関となって、ロシアの東洋学に新しいページを切り開くことができた。

Ⅱ．東洋学院の教育システムの特徴

東洋学院はロシアの大学の中でも無二の存在であった。同学院の学生と聴講生は、在学中の4年間に極東近辺諸国やヨーロッパ列強、そしてロシア本国についての知識を習得すると同時に、独自の研究活動に従事し、選択した２つの東洋言語のうち少なくとも一言語と、英語およびフランス語を実際に「聞き・読み・話し・書く」ことができるように、つまり完全なコミュニケーション能力が身に付くように、訓練を受けた。

11）東洋学院における在席将校の数は年毎に増え、日露戦争後は20人に達していた。東洋学院は、サンクトペテルブルグ大学など、東洋学を進めるその他の大学と違って、軍事学校色が強く、自由主義思想が欠けた閉鎖的な教育機関であった。

12）Буяков А.М. Подготовка офицеров-японистов в Восточном институте в 1899-1914 гг. // Японоведение в Восточном институте (1899-1906). Материалы международной конференции. Осака, 2006. С. 47-62.

13）Дальневосточный государственный университет. История и современность. Владивосток, 1999. С. 38.

14）国立極東大学は、ソビエト時代に「極東国立大学」と呼ばれ始めたが、ここでは、第2次大戦後の極東国立大学と区別するために、1939年の閉鎖まで「国立極東大学」と呼ぶ。

15）Хаматова А.А. История возникновения и развития востоковедения на Дальнем Востоке России // Японоведение в Восточном институте (1899-1906). Материалы международной конференции. Осака, 2006. С. 1.

東洋学院の規定により、同学院には、4つの学科（中国・満州科、中国・モンゴル科、日本・中国科、朝鮮・中国科）と7つの講座（中国語、日本語、朝鮮語、モンゴル語、満州語、歴史・地理、法律・経済学）があり、一般教養科目として14の科目が教えられていた。すなわち、（1）神学、（2）中国語、（3）英語、（4）フランス語、（5）中国・朝鮮・日本の地理・民俗学概論、（6）現代中国の政治体制、産業、商業、（7）同極東諸国の現代史（19世紀）、（8）東アジア通商地理と極東通商関係史、（9）政治経済学、（10）国際法、（11）ロシアとヨーロッパ列強の国家体制概論、（12）民法・商法及び法廷文書取扱原論、（13）会計・簿記法、（14）商品学である[16)]。

このほか学生たちは、各学科ごとに専門科目を履修した。中国・満州科では、最初は満州語及び満州の政治経済体制論、通商産業活動論を学習し、中国・モンゴル科では、モンゴル語、ラマ教学、モンゴル政治経済体制論、通商産業活動論を学んだ[17)]が、しかし1900年7月17日から、文部省の特別許可により、中国・満州科と中国・モンゴル科では、満州語とモンゴル語より中国語と中国関連科目の学習を重視するようになった[18)]。日本・中国科では、日本語及び日本政治経済体制論、通商産業活動論、朝鮮・中国科では、朝鮮語及び朝鮮政治経済体制論、通商産業活動論を学習していた。すなわち、各学科とも、当該地域の政治経済体制論、通商産業活動概論及び使用言語学習に重点が置かれた[19)]。

東洋学院は学習者に実践的な知識を与えることを課題にしていたため、学院創設2年目の1900-1901年度には「中国・朝鮮・日本現代史」のコースが設けられた。このコースの講義では、上記三カ国に関する様々な情報のほか、世界列強の東アジア政策を背景に、西洋と東洋の文化衝突の問題が取り上げられ[20)]、地理学の講義では、欧米諸国が特に重視していた都市や地域に関する詳細な情報が学習者に与えられ、海上・河川・陸上交通も詳しく教授されていた[21)]。宗教学講義でも、世界の主要宗教について解説が行われるとともに、ロシア正教会の海外活動が詳しく紹介された[22)]。

語学の授業では、生きた言語が学習され、方言や歴史的言説の文体の特徴も教えられた。また手紙文や公用文、外交・行政・法律文書や商業契約書、国際条約文などの講読および作文演習も行われた。外国語教育の問題は、東洋学院評議会で度々審議され、教授法の改良のために多くの努力が払われた。たとえば、実践的学習を強化するために文法講義の時間が減らされ、代わりにコミュニケーションや演習の時間が増やされた。学習用テキストには、学習者の専攻国の事情が学べるような文章が選ばれた。また学習者には言語理論を

16）Известия Восточного института, т. 1. Владивосток, 1900. С. 81.
17）同上、p. 82.
18）Отчет о состоянии и деятельности Восточного института за первые два месяца его существования в 1899 и 1900 году// Протоколы заседаний Конференции Восточного института// Известия Восточного института Т. II. Вып. 2. С. 149.
19）Известия Восточного института, т. 1. Владивосток, 1900. С. 82.
20）Протоколы заседаний Конференции Восточного института // Известия Восточного института. Т. II. Вып. 1. Владивосток, 1900. С. 5.
21）同上。
22）Протоколы заседаний Конференции Восточного института // Известия Восточного института. Т. I. С. VII-XI.

教える前に、実用文の読解、作文、当民族の日常会話を学ばせた。こうして東洋学院では、「言語習得から言語理論へ」という原理に基づいて言語教育が行われたのである。

このように実学志向を持つ東洋学院では、ロシアの従来型東洋語学校との違いを維持するために、学習者に研究課題（夏季研修旅行報告、月毎の研究課題）を与え、資料分析能力や論文執筆能力の養成にも力を入れていた。またこのとき、学術研究を実践的なものとするために、東アジア諸国の現状をめぐる問題が研究課題として取り上げられた。

東洋学院の構想では最初から、「教養のある現地人」を講師として採用することが見込まれていた。そのため1899年の設立当初から東洋諸語を母語とする講師たちが確保され、学生の教育を任されてきた[23]。ウラジオストクの地理的位置により、東洋諸語を母語とする講師を確保することは、比較的容易であった。そのうえ英語やフランス語の講師も当該国出身者の母語話者が多かった。当時はオーディオ教材が存在しなかったため、実践的言語教育では母語話者が果たした役割はきわめて大きかった。彼らは教材作成にも参画していた。例えば、スパルヴィンの数々の日本語教材の作成には、日本人講師の前田清治、川上英雄、松田護が参加していた。母語話者の講師たちは、各講座の教授の管理下に置かれ、日曜日でも無報酬で働かされたり、教授の自宅に呼び出されたりと、給料が安いわりに仕事が多かったために、入れ替わりが激しかった。

東洋学院の授業は、午前と午後で２分されていた。午前中は教授を中心に４－５時間の授業があり、午後には講師が２－３時間の授業を行った。午前中の授業では新しい資料を導入した講義と実用演習が行われた。これらはほとんどの場合教授が担当していたが、必要があれば講師も参加して、教授の指示に従って学習者を指導した。講師が担当する午後の授業は応用演習で、学習者は午前中に習ったテキストの内容を要約したり、その内容について会話を行ったりした。また漢字の書き方を練習したり、草書を習ったりもした。第３～４学年になると実務的な手紙や法律文、商業的な文書の書き方を練習した。東洋語を母語とする講師の努力により、東洋学院の学生は最初から専攻言語のリアルなコミュニケーションを学ぶ機会に恵まれていたのだ。

ウラジオストクは極東地方に位置していたため、研究・学習対象であったそれぞれの国も近かった。そのため「学習言語に習熟するために」[24] 学生を国費で専攻国に派遣するアイデアは、東洋学院構想時からあった。初代院長A.M.ポズドネエフは各国への研修旅行を実現させるために、北京の露清銀行、東清鉄道庁を始め、ロシアの海運局や個人商会に書簡を送り、協力を要請するとともに、上海、大連などの中国諸都市に滞在するための費用を調べた。こうして1900年4月18日、最初の研修旅行が行われ、A.V.ルダコフ教授の指導の下に東洋学院の12人の学生グループが国費で中国に派遣された。研修旅行参加者

23）Отчет о состоянии и деятельности Восточного института за первые два месяца его существования в 1899 и 1900 году// Протоколы заседаний Конференции Восточного института// Известия Восточного института. Т. II. Вып. 2. С. 84.

24）Основание Восточного института и торжественный акт его открытия // Известия Восточного института. Т. I. Владивосток, 1900. С. 26.

数は年々増加し、２年目の1901年には23人、1902年には33人となった。また聴講生たる将校は全員、毎年軍事予算で研修旅行をしていた。この夏季旅行では、１－２年生は語学研修だけに従事したが、３－４年生になると、言語学習以外に滞在国に関する学術研究の課題も与えられた。フィールドワークの方法論が発達していなかったので、学生たちは地理、漁業、農業、産業、商業、交通、教育、国家体制、宗教や日常生活など、ありとあらゆるデータを集めていて、日本の警察から、スパイ活動をしていると思われたことさえあったという[25)]。

学生や聴講生たちは収集した資料を報告書にまとめたが、この夏季研修旅行報告は1901年から『東洋学院通報』に掲載されるようになった。そのなかには、新渡戸稲造の『武士道』の紹介者であるＬ．ボゴスロフスキーが書いた『日本人の特殊性について－日本の貴族階級生活の倫理的基礎－』[26)] のように、今日にいたるまで日本に関する著作として読み続けられているものもある[27)]。夏季研修旅行報告は東洋学院創設10周年までに約300題ほど提出された 。

このように夏季旅行は東洋学院の教育システムの重大な要素となった。学生は旅行中に授業で身につけた知識を応用し、専攻国の現状を学んで独自の研究を実施するだけでなく、人的交流を通じて将来の活動に必要な社会的資本を獲得していったのである。教員についても、能力向上を図るために1900年から特別基金が設けられ、毎年４人の教員を研修旅行へ行かせるシステムが作られた。この基金のおかげで東洋学院の教員は東アジア諸国を訪問しただけでなく、東洋語教育事情を視察するためにヨーロッパ諸国も訪れた。

こうして『東洋学院通報』には、夏季旅行を経験した学生や教員によって多くの研究成果報告、旅行記、日記、教材、翻訳が掲載された。学院では毎年、秋になると夏季研修旅行の研究成果発表会が行われ、またその内容は公表されて討論の対象になった[29)]。学生による夏季研修旅行記の中で一番有名な著作は、P.ヴァスケーヴィチによる『敦賀新潟間日本旅行日記』である。この著書は東洋学院教授会で高く評価されて金メダルが授与されるとともに、1902年から1904年まで、『東洋学院通報』に掲載された。このほか東洋学院では、学生の学術研究活動を促進する目的で、毎月学生に研究課題が与えられた。東洋学院の規約によると、その内容は学年によって異なっていた。１年では西洋人による旅行記が研究対象として与えられた。２年生になると民族誌学、地理、歴史の文献の分析が、３－４年生には西洋と東洋の文献の比較が課題として与えられた。月毎の研究課題を評価するに当

25）История Дальневосточного Государственного университета в документах и материалах 1899-1939. Владивосток. 1999. С. 71-72.

26）Богословский Л. К вопросу о характеристике японцев. Этические основы жизни благородного сословия в Японии // Известия Восточного института. Т. III. Вып. 2. Владивосток, 1902. С. 1-92.

27）最近、再出版された。以下の論文集を参照。Удар Солнца или Гири чувство чести. М.- СПб.: Летний сад, 1999.

28）Отчет о состоянии Восточного института за 1909 год с историческим очерком его десятилетней деятельности// Известия Восточного института 11-й год издания, 1909-1910 академический год. Приложение 1-ое. Владивосток, 1910. С. 55.

29）Протоколы заседаний Конференции Восточного института за 1902-1903 академический год// Известия Восточного института. Т. V. Владивосток, 1903. С. LIII.

たっては、「学習者が得た独自の学術的結論」に特別の注意が払われた[30]。

このように東洋学院においては、実践的言語学習のほかに学生の学術研究活動も重視されていた。学生や聴講生による学術文献の翻訳とその解釈、夏季研修旅行報告の発表、月毎の研究課題の実施は、教員による研究活動とともに東洋学院における学術的雰囲気の形成に大きく寄与をしていた。歴史学と古典書の読解・解釈を重視していたロシアの従来の東洋学と違って、東洋学院の教育システムは、極東の隣国で実際に使われていることばと実践的な知識を身につけさせ、その現状を研究する能力を養うことを目的としていた。母語話者である講師たちは、録音機などが存在しなかった時代に、学生の言語演習のなかで重要な役割を果たしていた。

Ⅲ．日本語教育

欧米で作成された日本語の教科書は、東洋学院の使命に合わなかったため、学院のほとんどのコースでは独自の教材が作製された。東洋学院の全ての時期を通じて日本学の中心的人物は、E.G.スパルヴィン（1872-1933）であった。スパルヴィンは、ロシア帝国のリフリャンド州（現在のラトビア）出身で、1898年にサンクトペテルブルグ大学の中国・モンゴル・満州科を卒業した。その後、サンクトペテルブルグ大学東洋学部に新設された日本語講座へ就任するための準備として、1899年の１月１日から２年間の予定で日本研修に派遣されたが、恩師のA.M.ポズドネエフの紹介により、1900年の７月１日からウラジオストクの東洋学院に准教授として着任し[31]、その後、東洋学院および後身の国立極東大学東洋学部で、約25年にわたって日本学を担当した。

スパルヴィンは、E.Satow、W.G.Aston、B.H.Chamberlain、R.Lunge、その他のヨーロッパの日本研究家が作成した教材や文法書を参考にしつつ、日本人講師の手を借りながら新しい日本語教材の作成に着手した。それは片仮名・平仮名入門書や初心者向けの読本から始まり、演説文、新聞記事、公文書や書簡、軍事用語の教材など、ありとあらゆる種類におよび、その数は数十点にものぼった。こうして彼の尽力により、ロシアの大学における日本語教育の基礎が築かれ、ユニークな日本語教育システムが開発されたのだ。

スパルヴィンは、東洋学院や国立極東大学の東洋学部において、年度にもよるが１週間に17時間もの講義を担当していたこともあった。それにも拘らず、彼は東洋学院図書館長として東洋学関連文献の購入、文献記述や目録作成を行うとともに、日本からの日本語講師の招待や『東洋学院通報』の編集も担当した。一時彼は東洋学院長や国立極東大学の東洋学部長も務めたが、先端的な日本語教材の作成や版の改良も継続して実行した。スパルヴィンによる日本語教材は内容の深さとシステマチックな編成を特長としていたため、国

30）Инструкция в дополнение к Положению о Восточном институте. Приложение к протоколу 3 марта 1900 года// Протоколы заседаний Конференции Восточного института. Известия Восточного института. Т. I. С. 5-6.

31）詳しくは以下を参照。Ермакова Э.В., Дыбовский А.С. Е.Г. Спальвин: страницы биографии. // Первый профессиональный японовед России. Опыт латвийско-российско-японского исследования жизни и деятельности Е.Г.Спальвина. Изд-во Дальневосточного гос. ун-та. Владивосток, 2007. С. 7-35.

立極東大学、サンクトペテルブルグ大学、モスクワ大学など、ロシアや旧ソ連の日本語教育機関に、20世紀をとおして多大な影響を与えた。1900年８月に日本から新就職先のウラジオストクに到着したスパルヴィンは、教育活動に没頭し、東洋学院における外国語教授法改善に大きな貢献をした。彼は日本語初級クラスの文法の講義を日本語の応用練習と結合させ、東洋学院で担当していたほとんどのコースのために新しい教材を作成した。

1900年からスパルヴィンが逐次『東洋学院通報』で発表した『口語日本語読本』[32] は、初心者向けの重要な教材である。この読本のテキストは、最初は片仮名（奇数番号のテキスト）と平仮名（偶数番号のテキスト）で書かれていたが、この読本では日本庶民の口承文学作品が利用されており、1. 一口噺、2. 諸国のお伽噺、3. 日本の御伽噺、4. 日本の昔噺、5. 落語、6. 講談、7. 諺の７章から構成されていた。テキストは和語中心の会話文が多く、内容が分かりやすい物語を多く含んでいた。また学習者の苦労を軽減するように、漢字を使わず、単語と単語の間に空白が入れてあった。1907年の『東洋学院通報』では漢字仮名交じり文のバージョンも発表された。

『口語日本語読本』は、学習者を日本庶民の話芸の世界に誘い、容易な文章で日本語の基本語彙と基礎文法を導入するのに使われた。概算では、この読本では約7 ～ 8千語が使われている。学習者は農民や大名、侍、娼婦など、各社会層の話し方の特色を実感し、日本語の話し方やあらゆるコミュニケーション場面のディスクール・シナリオを把握することができた。この読本は440ページもある大部なもので、読者は日本語口語文の特徴のほかに、日本神話や歴史、庶民の日常生活様式や宗教行事、倫理感、精神世界に関する知識を得ることができた。御伽噺の主人公には動物や鬼、天狗などがいるが、彼らは「目上―目下」「内―外」「与える者―与えられる者」などの関係を持って人間のように行動し、状況にふさわしい会話を展開している。こうして学習者はわかりやすい御伽噺を読みながら、「義理」「恩」「恥」「罰」などの日本文化特有の概念を知り、日本人の口頭コミュニケーションの世界へと導かれていったのだ。

『口語日本語読本』の最初のバージョンでは変体仮名が使われているが漢字の使用は控えられ、日本語表記の問題はある程度避けられていた。しかしスパルヴィンは、日本語の学習は文語でも口語でも表記の問題と密接に関わっていると考え、漢字の習得が重要だとみなしていた[33]。そのため『口語日本語読本』と並行して日本・中国科の２年で使用する教科書として、日常会話と漢字を学ぶための『日本語実用会話：日本語会話および日本文字初級教材』[34]（以下『実用会話』）を作った。

1900年から発表され始めた『実用会話』は総合的な日本語教材であり、57の章と1668の学習用テキストから構成されている。テキストには番号が振られており、漢和辞典の形式

32）ここでは1903年にウラジオストクで出版された «Хрестоматия японского разговорного языка»（『口語日本語読本』）第１巻、第３巻を参照した。

33）Практические японские разговоры // Часть I. Владивосток, 1909. С. VII.

34）以下では次の版を検討する。Практические японские разговоры // Пособие для изучения простейших форм японского разговорного языка и для введения в японскую письменность. // Часть I, II. Владивосток, 1909-1910（本書の題名には、『実用会話』という日本語のタイトルも付いている）。

で作られ、新出漢字別熟語集も別冊で用意されていた。テキストの一部は、E．サトウ（Ernest Satow）とドイツの日本学者R.ルンゲ（Rudolf Lunge）の日本語教科書から採用され、また一部は東洋学院の日本語講師であった前田清治と松田衛によって作成された後、何回も校正された。『実用会話』の文章は、漢字仮名交じり文（偶数のページ）と平仮名（奇数のページ）という二通りの表記で記載されている。

『実用会話』を用いた日本語学習は、難易度順に並べられた文章の読解から始まる。テキストは最初の章から最低でも一つの文章から成り立っている。入門レベルにあたる１－27章は110ページにおよび、それは教材全体の４分の１程度を占めている。この入門部分のうち５分の４にあたるテキストは、文法事項に基づいて配置されており、残りの５分の１は復習用の文章で、テーマ別に並べられている。学習者は週３回の授業で、まず文章を読解し語彙を習得した上で、文法の解説を聞いた。『実用会話』の入門部分が半分程度（58ページ）進むと、『口語日本語読本』の一口噺と一番簡単な御伽噺の読解が始まり、複数の教材を用いた授業が進められた。日本人講師による午後の授業では、学習者はテキストの内容を要約し、テキストのテーマに関する会話を行うとともに、漢字の執筆と「速読」の練習をした。

５～６ヶ月ほどして入門レベルが終わると、学習者は口語文法の基礎を習得し、日本語文章が読めて簡単な会話ができ、口語体と文語体の違いがわかるようになる[35]。『実用会話』の残りの部分は、東洋学院の学生と聴講生が体験することになっていた「日本への旅」というストーリー展開で構成され、テキストは「出発前」「船の中」「旅館着後」「買物に就き」「教師雇」「女中雇」「東京市中見物」「婚礼」「産事」「死去」「雪見」など。テーマごとに整理されていた。このストーリーには日本とその住民の生活について様々な情報が盛り込まれ、学習者がテキストを読むことで日本の日常文化を学べるよう工夫されていた。文法学習という点では、教材の後半では細かなニュアンスが注目され、口語体のなかで用いられる文語体要素に焦点が当てられた。テキストには、名言や詩、よく使われる諺が引用された。

文字の教育において、スパルヴィンは、学習者が分かりやすい文字で日本語を書き、またどんな書体の文章でも読めるように、課題を与えた[36]。もちろん先駆的な教材としての『実用会話』には、欠点がなかったわけではない。例えば漢字の使用においては、現代の教科書では常識となっている、やさしい漢字から難しい漢字へという一貫性がなく、最初から難しい漢字（編、纂、故、墨、御、硯、餘など）が使われていた。また文面節約のため、文章が詰まりすぎて読みにくい所がある。

667ページに及ぶ『実用会話』の第２巻に収められた新出漢字別語彙集には、2168個の漢字とその熟語（ロシア人には難しい固有名詞や地名を含む）が載せられ、漢字の音・訓読み、場合によっては新・旧字体、表音的使用や語源などが解説されている。この第２巻に付された別冊の漢字索引のおかげで、学習者は上記語彙集を和露辞典として使うことが

35）Практические японские разговоры // Часть I. Владивосток, 1909. C. XI-XII.
36）同上、pp. XXIV.

できた。このように東洋学院の日本・中国科の第２学年で使われた『実用会話』は、学習者のニーズに基づいて巧みに編成されており、20世紀初頭の外国語教授法の先端を行く日本語教科書であった。

ここで、『実用会話』の別冊付録として作られた『日本陸軍』[37] という教材を詳しく見てみよう。この教材は日露戦争後の一時期に、聴講生である将校の数が一般学生数を超えた時に、軍事用語学習コースで使われたものである[38]。『日本陸軍』は40のテーマ別テキストで構成されていたが（「徴兵」「兵種」「服役年限」「陸軍の記章」「参謀本部」「軍隊の通信」など）、その構造は『実用会話』と同じで、偶数ページには漢字仮名交じり文が、奇数ページには平仮名文が配置されていた。また新出漢字別語彙集は『実用会話』の続きで2169番から2554番まであり、漢字索引には、当教材の新出字のみが収められた。『日本陸軍』には二人の聴講生（S.G.レオンチェフ、O.F.マイ）によって収集された軍事用語集も付けられている。テキストは『最近陸軍』を参考に、日本人講師の川上英雄と松田衛が会話の形式で分かりやすい口語体で書いたものである。『日本陸軍』は内容も充実していたため、ロシア軍のための情報誌としてロシア語でも出版された。一年以上日本語を習った聴講生のクラスで授業50時間の予定で使われた。

スパルヴィンが編纂した教材『現代諸家談論集・現代日本語実用会話上級教材』[39] は、口語日本語上級コースのために作成されたものである。この教材は近衛篤麿の「凡と非凡」で始まり、板垣退助、清浦圭吾、加藤弘之など、明治・大正時代の日本の有名な政治家、社会活動家、教育者、法律家、軍人、銀行家や実業家などの談論が28点採録されている。それぞれの談論は２、３ページのものから10ページを越えるものまでさまざまであり、取り扱われているテーマも政治、経営、経済、法律、教育、演劇、体育、読書など多岐にわたる。テキストは口語体で書かれてはいるが、書き言葉や文語的表現も多く含んでいて、当時の社会政治言説を学ぶ入門書の役割を果たしていた。

このほか、東洋学院の日本・中国科の上級学年では、文語、候文、漢文などを学ぶために、E.G.スパルヴィンが編纂した『日本語読本』が用いられていた。この本は20章からなり、各種の公文書、書簡、領収書、広告、電報、国際条約文、契約書、説明書、警察議事録、ロシア兵捕虜尋問調書など、実際に使用された文書が読解用テキストとして掲載されていた。この教材は合計で1000ページを超える大部なものだったので、テキストと新出語彙集の形式で作られ、数章ごとに分割して1908-1911年に石版印刷により出版された[40]。

東洋学院議会の議事録には、10年の歳月をかけて執筆された文法書の出版に関する話し

37）Японская армия.『日本陸軍』Пособие по изучению важнейших японских военных терминов. Часть I. Владивосток, 1909.

38）同上、pp. V.

39）Собрание бесед и рассуждений современных японских деятелей. Пособие для изучения наиболее трудных форм современного японского делового разговорного языка. Часть I. Японский текст. Владивосток, 1913. 本稿では第一部のみを分析した。

40）Японская хрестоматия『日本語読本』. 2-е изд., литогр. Владивосток, 1908-1911. その中身の記述は、以下を参照。Библиографический указатель основных научных трудов Е.Г. Спальвина // Известия Восточного института. Владивосток, 2005. С. 258-259.

合いの記録が残っている[41]。しかし結局、その文法書は完全な形では刊行されず、スパルヴィンはそれを補うために、日本語口語・文語文法講義を行っていた。この講義の内容は後に、学生の取ったノートに従って出版されたが、今ではほとんど残っていない。このほか、1913年には文語文法書の一部としてスパルヴィンの『日本文語活用品詞概観』が出版されていて、同志社大学の蔵書としてみることができる。この文法書の中でスパルヴィンは、W.G.Astonの“A Grammar of the Japanese Written Language”とB.H.Chamberlainの“A Simplified Grammar of the Japanese Language. Modern Written Style”が時代に合わないものだと指摘している。また大槻文彦の文典を参照して文法事項を説明する際、学習者が日本で出版された文法書を使えるように、日本語の重要文法用語を紹介している[42]。

以上のように、スパルヴィンは約25年間東洋学院と、その後継組織になった国立極東大学の東洋学部に在籍していたあいだ、学習者が日本の言語文化を総合的に学べるような、当時世界に類のない日本語教材セットを作りあげ、外国語教授法を改良することで、ロシアにおける日本語教育の土台を築きあげた。彼の業績はその後も、ソ連邦時代をふくめ、20世紀ロシアの日本語学の３大中心地となる国立極東大学、サンクトペテルブルグ大学、モスクワ大学で利用され、各大学での日本語教材作成に影響を与えた。

例えば、1923年に国立極東大学で出版されたT.S.ユルケーヴィッチの『口語日本語学習教材』の前文には、E.G.スパルヴィンとV.M.メンドリン（メンドリンについて、本章の後半と次章を参照）の教材との関連性が言及され[43]、1946年刊行のN.I.コンラドの『日本の読本』第２巻[44]と、1949年刊行のA.パシュコフスキーの『日本軍事公文書露訳教材』[45]では、ウラジオストク実用東洋学派らしく、本物の公文書テキストを教材に使う伝統が確認できる。またN.I.コンラドの同読本の第３巻[46]は、スパルヴィンの教材と同様、語彙表およびコメントがつけられた近代日本文学テキストから構成されている。また同書は東洋学院の日本語教材と同様に、本書にはおもて表紙と裏表紙があり、一方にロシア語のタイトル（Хрестоматия японского языка）、もう一方には日本語のタイトル（日本語読本：明治・大正文学選集）が付けられていた。1973年にモスクワ大学で出版されたI.V.ゴロヴニン監修の『日本語教科書（中級用）』は、スパルヴィンの『実用会話』と形式が似ており、日本からの観光客のガイド業を行う学生にとって実用的なテーマ（市内見物、食堂車にて、プーシキン名称造形美術博物館など）で構成されている[47]。また同教材の初心者用では、片

41）Протоколы заседаний Конференции Восточного института за 1908-09 акад. год // Известия Восточного института. 10 год издания. 1908-1909 акад. год. Приложение 2-е. Владивосток, 1909 г. С. 48-49.

42）Спальвин Е.Г. Краткий обзор изменяемых частей речи японского книжного языка. Пособие к лекциям по грамматике японского книжного языка, читанным в Восточном институте. Выпуск 1-й. Владивосток: Типо-литография Восточного института, 1913. С. 1-152.

43）Юркевич Т.С. Пособие к изучению разговорного японского языка для начинающих. Владивосток, 1923.（当該ページは第２表紙の裏側で、番号が振られてない。）

44）Конрад Н.И. Хрестоматия японского разговорного языка. Выпуск 2-й. Образцы официальных текстов. М., 1946.

45）Пашковский А. Пособие по переводу официальных японских военных текстов. М.: Военный институт иностранных языков, 1949.

46）Конрад Н.И. Хрестоматия японского языка. Выпуск 3-й. М., 1949.

47）Учебник японского языка (для продолжающих). Часть. 1-2. Под ред. И.В. Головнина. М., 1973.

仮名と平仮名が交互に使用されるという、スパルヴィンの『口語日本語読本』と同じ手法が取り入れられている[48]。

E.G.スパルヴィンのほか、東洋学院と関係があるロシアの有名な日本学者として、D.M.ポズドネエフ（1865-1937）を挙げることができる。D.M.ポズドネエフは、東洋学院の初代院長であったA.M.ポズドネエフの弟である。彼は1893年に優秀な成績でサンクトペテルブルグ大学の中国・モンゴル・満州科を卒業した後、東洋史の修士号を修得し、1896年からはサンクトペテルブルグ大学の専任講師として中国史の講義を担当していた。1898年からは大蔵省の４級特別任務役員として露清銀行北京支部で勤務し、その後1904年６月に東洋学院長に任命されて、ウラジオストクに赴任した[49]。

D.M.ポズドネエフが東洋学院長になったのは、同院の歴史のなかで一番苦しい時期であった。前述のように東洋学院は1905年の２月から９月まで日露戦争の被害をさけてヴェルフネウディンスクに疎開していたが、D.M.ポズドネエフはウラジオストクに帰還して間もなく、1905年11月１日から４ヶ月の休暇をとった。そして日本に出張している間に、病気のため退職願いを出した。院長のポストを辞退してから約４年間、D.M.ポズドネエフは日本に留まり、日本の地理、経済、歴史、露日交流などを研究した（次節参照）。また同時に、『露訳漢和辞典』[50]、『尋常小学校読本』[51]、『手紙の文』[52]、『日本：地理・統計概説』[53] などの著作も執筆した。

1910年、D.M.ポズドネエフはロシアに帰国し、サンクトペテルブルグの実践東洋アカデミーや国民経済大学、そしてモスクワの軍事アカデミーなどで教鞭をとり、日本について講義した。D.M.ポズドネエフは、一生、実践的日本学の伝統を堅持しており、日本の研究家の著作を学ぶことを重視していた。

D.M.ポズドネエフの編纂した日本語教科書について言えば、E.G.スパルヴィンとV.M.メンドリンが作成した主な日本語教材よりは劣るものの、日本語教育のための独創的な教材を作ろうとしたことは評価すべきである。なかでも『尋常小学校読本』第１巻（東京、1907）は、特筆に値する。これは子供でも理解できるような、日本の小学校の読本のテキストを使って、学習者に生きた日本語を学ばせようとする試みであった。D.M.ポズドネエフは、語彙レベルで日本語とロシア語の対応を求め、直訳で日本文の意味を伝えようとする場合が多く、ロシア語の文章としての美しさ、文法的正しさを犠牲にすることがあった。それゆえスパルヴィンがD.M.ポズドネエフの別の教材『日本歴史読本』（1908）を厳

48）Учебник японского языка (для начинающих). Под ред. И.В.Головнина. М., 1971.

49）D.M.ポズドネエフの伝記について以下を参照。Лещенко Н.Ф. Опальный профессор (Д.М.Позднеев). 1865-1937//Российские востоковеды. Страницы памяти. М., Муравей, 1988. С. 7-27; Н.В.Кочешков. Восточный институт во Владивостоке (1899-1920 годы) и его профессора // Учебно-справочное пособие. Владивосток 1999. С. 41-48.

50）Позднеев Дмитрий. Японо-русский иероглифический словарь (по ключевой системе). Токио, 1908.

51）Позднеев Дмитрий. Токухон, или Книга для чтения и практических упражнений в японском языке. Часть первая. Токио, 1907.

52）Позднеев Дмитрий. Японский письмовник. Часть первая. Частная переписка. Йокогама, 1909.

53）Позднеев Дмитрий. Япония. Географически-статистический очерк// Известия Восточного института. Т. XVI. Владивосток, 1906. С. 1-145.

しく批判したことも、根拠がないわけではない[54]。だがそれでも、D.M.ポズドネエフの作成した教材はセンスの良い文体を持つ、生きた日本語に基づいており、当時のロシアの日本語学習者にとって有益なものであったと思われる。

東洋学院の卒業生にも才能に恵まれた日本研究者が大勢いた。V.M.メンドリン（1875 - 1920）もその一人である。メンドリンは1901年に聴講生として東洋学院に入学する前は、コサック軍の副大尉の称号を持っていた。学生時代、彼はW.G.Astonの『日本文学史』を翻訳し、その後も1908年には、日本で出版された巌谷小波（漣山人）の『日本昔話』を翻訳した[55]。メンドリンは、日本文学に没頭したことにより、文化相対主義に近い見地に至り、一民族の文学をもってその民族の文化的発達の水準が計れると考えていた。W.G.Astonの『日本文学史』の翻訳書にある訳者前書きを読んでみると、V.M.メンドリンの関心分野が広く、英語、フランス語、ドイツ語で書かれた言語学の著作に詳しく、日本の書き言葉の表現性に関心を持っていたことが分かる[56]。メンドリンは1906年に日本・中国科を卒業し、E.G.スパルヴィンの一番才能のある教え子の一人[57] として東洋学院の教員になることが期待された。そしてその準備として、彼は1908年1月から日本に派遣され、1914年まで滞在していた。最初彼は国学院大学で外交や社会学の講義を受け、その後1911年9月からは、ロシア人として初めて日本の大学の大学院に入学し、日本文学者の芳賀矢一を指導教員として、文学研究に従事した[58]。

ロシアへ帰国したV.M.メンドリンは、E.G.スパルヴィンが作りあげた東洋学院の日本語教育システムを完成させた。また日本滞在中の1910ー1914年には、２巻からなる『候文・日本書簡文体分析』を執筆した。この書は、候文を詳細に分析記述したもので、候文の実例と、それを学ぶための解説で構成された教材である。V.M.メンドリンは、前文で20世紀後半の言語学の有力な流派になった人間中心的言語学理論を展開し、日本の書き言葉の特殊性について論じている。彼はまた、楷書、行書、草書など日本語の書体について論じて、草書は芸術の一形態であると断言し、候文は草書と不可分のものであるとして、外国人でも草書が学べると主張している[59]。第１巻には楷書と草書で書かれた小野鵞堂のテキストが採用され、難易度順に整理されている。第２巻では候文の語彙的、統合論的、文体的特殊性及び儀礼上の特徴を分析している。

メンドリンは45歳で死去し、ウラジオストクのポクロフスコエ墓地に葬られた。しかし

54）Спальвин Е.Г. К характеристике трудов и направления г. Дмитрия Позднеева в области японоведения. 1. Критический разбор «Японский исторической хрестоматии» (ч. 1, отд. 1 и 2) г. Дмитрия Позднеева // Известия Восточного института. Т. XXIII. Вып. 3. Владивосток, 1908.

55）この翻訳書は近年再版された。Садзанами Сандзин. Сказания древней Японии. Перевод с японского и примечания В.М. Мендрина. М.-Спб.: Летний сад. 2000.

56）Астон В.Г. История японской литературы. Перевод с английского слушателя Восточного института, подъесаула В.Мендрина. Под редакцией и.д. профессора Е. Спальвина. Владивосток, 1904. С. XII.

57）同上。

58）Приложения к протоколу заседания 8 марта 1912 года. Приложение № 1 // Протоколы заседаний Конференции Восточного института за 1911-1912 акад. год　// Известия Восточного института. 1911-1912 акад. год. Приложение 2-е. Владивосток, 1914. С. 84-85.

59）Мендрин В.М. Соробун. Анализ японского эпистолярного стиля// Введение в японский текст в полном начертании и скорописью. Владивосток, 1910. С. 44.

その名は、日本語教材の作成者、翻訳者、東洋学院教員としてだけではなく、1918年にウラジオストクに創設された工業大学（現在クイブィシェフ名称極東国立工業大学）の初代学長としても、ロシアの教育史に残っている。

このように、東洋学院はスタッフの数が少なかったにもかかわらず、E.G.スパルヴィンとその同僚の努力により、ユニークな教育システムが開発され、短期間で世界的なレベルの日本学センターとなった。東洋学院の日本語教材は次世代においても教材の見本となり、20世紀のロシアや旧ソ連における日本語教材の作成に大きな影響を与えた。

Ⅳ．日本研究

東洋学院の日本研究の特徴は、ロシアにおける従来の日本学に比べ、当時の日本の共時的研究が多いこと、また様々な新分野を開拓した「先駆的」研究が多いことにある。東洋学院の教員、学生、聴講生らは、日本でフィールドワークを行い、地理や人口問題、商業、産業、教育、政治、経済および対外通商関係など、当時の日本の各種現実を観察、究明することで、ロシアにおける「日本人論」研究を開始した。それと同時に彼らは、ウラジオストクをはじめ、極東ロシアの諸地域における日本人居留民の研究を通じて、日本人移民の研究を展開した。東洋学院の研究者たちは日本の学術研究にも関心を持ち、日本人の著作や日本文学作品を原文で読み、翻訳した。

東洋学院における日本研究もE.G.スパルヴィンの著作から始まる[60]。E.G.スパルヴィンが東洋学院時代に書いた日本に関する学術的著作は、主に日本語の記述と日本人論に関するものである。そのなかで比較的に広く知られている論文が３点あり、いずれもまず東洋学院で口頭で発表されたのちに『東洋学院通報』に掲載された。最初の論文は1900年９月２日にE.G.スパルヴィンが東洋学院で行った最初の講義「日本人の言語と文字の基礎概論」をまとめたものである。この中でE.G.スパルヴィンは、東洋学院の教員の崇高な使命について語り、19世紀末における日本語理論の基本的事項を解説しつつ、日本語の系統に関する最新データの紹介、また日本語における借用語の問題、日本の文字の出現と文体の特殊性、日本語表記の複雑さやその改革の必要性、日本語と中国語の歴史的関係について論じた[61]。２番目の論文は、「日本的進歩」という題名で、1900年10月21日の東洋学院設立１周年の記念式典で発表された。この論文は、西洋諸国とロシアの世論が日本の急激な発展に感激していることへの反応として書かれた。スパルヴィンは、日本による西洋文化の模倣は、日本の固有文化の破壊を伴うと主張し、日本中心主義が愛国主義的狂信性に転じてしまう可能性について世論の注意を喚起している[62]。３番目の論文「日本民衆の倫理規範における儒教思想」は、1909年10月21日の東洋学院設立10周年記念式典で発表された。

60）スパルヴィンの著作リストは、以下を参照。Известия Восточного института. Изд-во ДВГУ. Владивосток, 2005. С. 251-261.

61）Спальвин Е.Г. Очерк основ языка и письменности японцев // Известия Восточного института. Т. II. Вып. 1. Владивосток, 1900. С. 1-32.

62）Спальвин Е.Г. Японский прогресс // Известия Восточного института. Т. II. Вып. 2. Владивосток, 1901. С. 33-44.

E.G.スパルヴィンは日本思想における儒教的道徳規範の特殊性を検討し、中世の歴史的出来事を例にとって、中世日本の儒教的道徳規範では主人と家来の関係に重点が置かれていることを主張し、その受容傾向について論じている[63)]。

E.G.スパルヴィンは長い間、教育者として日本の文字の問題に取り組み、一度ならず日本語の表記法に言及してその改革の可能性を論じた[64)]。彼は学生時代から詩に関心を持ち、『日本の詩における日露戦争の反映』を執筆している。また東洋学院らしい実践的研究として、ウラジオストクとアムール州における日本人居留民の問題を研究し、1908年には『ウラジオストク市の日本居留民会』[65)] を執筆した。教材としては、徳川時代及び明治時代の日本の国家機構を詳細に記述した『過去と現在における日本政治機構の概観』[66)]、『平仮名と片仮名入門』[67)] などを発表している。このほかE.G.スパルヴィンは監修も行っている。それは『東洋学院通報』や、Z.マトヴェエフ、A.ポポフ編『日本文献目録』[68)]、T.S.ユルケーヴィッチ著の『現代日本:イラストや地図を含む日本の最新資料に基づく経済・地理概要』[69)] などである。また彼は文献目録の作成やカタログへの執筆も行い[70)]、1931年には回想録、日記、随筆、論文などを収録した著書『横目で見た日本』を日本語で刊行した。

E.G.スパルヴィンの最後の著作は、ロシア語話者向けに書かれた『日本語会話』で[71)]、W.M.McGovernの“Colloquial Japanese”[72)] の増補露訳版として出版されたものである。上記の書は日本語文を日本の文字で表記していなかったため、E.G.スパルヴィンはそれらを現代日本語標記に改め、さらに日本語の標記法の詳しい解説を付け加えた。

東洋学院は露日通商関係を担う専門家を養成することを目的としていたため、日本の経済動向を把握して講義に反映させることは喫緊の課題であった。この分野における最初の試みとして挙げることができるのは、政治経済学者N. コハノフスキーの「日本経済状況概説」である[73)]。この論文は主に英語とフランス語の文献及び雑誌新聞の資料に基づいて、日本経済の基本問題が分析されている。東洋学院の学生にとって日本の地理的知識も必要不可欠であった。日本の地理に関するの初の論文は、N.V.キューネルによる「1903ー1904

63）Спальвин Е.Г. Конфуцианские идеи в этическом учении японского народа // Известия Восточного института. Т. XXXI. Вып. 3. Владивосток, 1913.

64）Японский разговорный язык // Третий концентр с приложением 3000 полезных слов. Токио-Харбин: Наука, Харбинское отделение, 1933; スパルウキン著『横目で見た日本』新潮社、東京、1931（第7部「日本語の合理化」参照）。

65）Спальвин Е.Г. Японские общества города Владивостока. Известия Российского государственного исторического архива Дальнего Востока. Т. II. Владивосток, 1997.

66）Спальвин Е.Г. Обзор политического устройства Японии в прошлом и настоящем. Ч. 1-2. Владивосток, 1909-1910.

67）Разбор японских азбук хирагана и катакана. Владивосток, 1908-1909.

68）Матвеев З.Н., Попов А.Д. Библиография Японии. Ч. 1-2 / ; под ред. Е.Г. Спальвина. Владивосток, 1923.

69）Юркевич Т.С. Современная Япония: Экономическо-географический обзор по новейшим японским источникам с иллюстрациями и картами. М.: Госуд. воен. изд., 1925.

70）Спальвин Е.Г. Библиографические заметки по японоведению // Критика и библиография Т. I. Вып.I // Известия Восточного института. Т. XXXI. Вып. 1-й. Владивосток, 1909. С. 1-21.

71）Японский разговорный язык // Первый и второй концентры/ Третий концентр с приложением 3000 полезных слов. Токио-Харбин: Наука, Харбинское отделение, 1933.

72）McGovern W.M. Colloquial Japanese. London-New York, 1920.

73）Кохановский Н. Очерк экономического положения Японии // Известия Восточного института. Т. V. Владивосток, 1903. С. 1-130.

年度作成日本地理概要:東洋学院学生指導書」[74]であった。この論文には日本の地理や気候、海岸線や海流、河川や動植物界の特色、アイヌなど日本の先住民の問題を含む人口問題が記述され、港湾や漁業、日本の通商関係の可能性を論じている。また日本文化への中国文化の影響や、日本民族のルーツに関する欧米の文献にも言及している。

ロシアにおける20世紀初頭の日本学に大きく寄与したのは、D.M.ポズドネエフである。D.M.ポズドネエフは、大学卒業後にヨーロッパへ出張した時から日本に関心を持ち、日本の地理、人口、経済について著述を重ねてきた[75]。そしてついに1925年、多年に渡る努力の結晶として、その分野の知識をまとめた『日本：国・人口・歴史・政治』[76]を刊行した。

このほか日本の地理に関する著作の中では、東洋学院の経費で出版され、『東洋学院通報』にも掲載された『日本の地理・統計概説』も特筆に値する。この論文書は３章構成となっており、第１章は「地理」、第２章は「人口」、第３章は「行政制度」に当てられている。各章では日本の自然地理学や経済地理のほか、日本人のルーツ、出生率や死亡率、人口密度や国政調査の歴史、社会階層や人口移動、天皇の権限、立法機関と執行機関の活動、行政制度史や政党結成史、行政区画、裁判制度や内閣形成の仕組など、幅広い問題が解説されて、日本の現状を総合的に把握しようとする意図が見られる。またこの論文では非漢字文化圏の人々には難しい日本の地名や人名の漢字表記を扱っており、その点で1903年に出版されたN.V.キューネルの上述書、『日本地理概要』を超えている。

D.M.ポズドネエフによるユニークな研究として、『北部日本の歴史及びそのアジア大陸とロシアとの関係に関する諸史料』を挙げよう。これは主に日本の研究家の著作に基づいて、北日本の住民と古代満州や渤海など東アジア諸民族との接触、及びラクスマンとレザノフの日本への航海を始めとする日露交流史を研究したものであった[77]。

1908年に東京で出版されたD.M.ポズドネエフの『露訳漢和辞典』では、4200字が抽出され、約３万の熟語が掲載されているが、この中にもやはり、日本の漢和辞典には普通は掲載されない、外国人にとって特に難しい地名や人名が含まれている。また漢和辞典としての内容以外に、日本語の文字の歴史についての解説があり、その中では漢和辞典の内容からは程遠い、日本におけるローマ字標記の歴史まで言及されている[78]。

実践的日本学の道を歩んだメンドリンの研究活動は、東洋学院における日本語教育と翻

74）Географический очерк Японии, составленный в 1903-1904 акад. году и. д. проф. Н.В. Кюнером к руководству студентов Восточного института// Известия Восточного института. 1903-1904 акад. год. Том X. Владивосток, 1904. С. 101-198.

75）Позднеев Дмитрий. Настоящее и будущее Японии по взглядам европейской литературы / Япония. Ее экономическое положение и торгово-промышленное отношение к России. Спб., 1896; Позднеев Дмитрий. Япония: военно-экономическое описание. М.: Изд. Развед. упр. штаба РККА, 1924.

76）Позднеев Д.М. Япония: страна, население, история, политика. М.: Воениздат, 1925.

77）Позднеев Д.М. Материалы по истории северной Японии и ее отношений к материку Азии и России. Т. 1-2. Йокогама, 1909.（この本は、第２巻のみ調べてきた）。

78）詳しくは、以下を参照。安元隆子「ドミトリー・マトヴェエヴィッチ・ポズドネエフ『露訳漢和辞典』についての一考察」『国際関係学部研究年報』（第25集）日本大学国際関係学部〔編〕2004. Pp. 107-116.

訳の歴史とも密接に関わっている。メンドリンは日本語の口語文法を始め、文語、漢文、候文、日本文学を研究した。特に日本の歴史、文学、言語学の学術用語を注意深く学び、人文科学用語の露訳に努めた。前述の『候文・日本書簡文体分析』の中で、メンドリンは日本の書き言葉の歴史、候文の文体や文法について解説し、その語彙的、形態論的、統合論的特殊性を解明して、候文と漢文の関係について論じた。このほかV.M.メンドリンは、漢文で書かれた頼山陽の『日本外史』22巻中の６巻を露訳している。また別巻として出版された翻訳解説[79] では、漢文の簡潔さを生かす『日本外史』の文体的魅力を論じ、日本の歴史用語を分析して、「将軍」「幕府」「征夷大将軍」「節刀」「大刀契」「持節」「公卿」「公家」など、1192年から1867年にいたる日本史基本用語の変遷と意味的内容を明らかにした。その他、幕府時代の階位、管領、京都内裏、六衛府などの説明、京都略図、六衛府陣座略図など、明治維新以前の日本の状況を図解している[80]。メンドリンの著作は、今日においても高く評価されており、東洋学者の高い関心のもと再版されている。

N.マツォキン（1886-1937）は、東洋学院、国立極東大学、そして後にはモスクワエネルギー大学などで活躍したが、1937年にスパイ活動の容疑で逮捕されて射殺された。N.マツォキンは、才能豊かな研究者で、20世紀初頭の東洋学者らしく関心分野が広かった。彼は学生時代から民俗学と社会学に関心を持ち、ヨーロッパの民俗学者の著作に基づいて中国、朝鮮、日本、チベット、モンゴルなどの東・中央アジアの諸民族における母系親族関係の問題に取り組み、口頭伝承、神話、漢字、言語などを分析することで、かつて当地域における母系・母権制時代が存在したことを立証しようとした[81]。彼は後に日本神話に関する著名な論文[82] を執筆し、その中で神話を文化人類学的情報の源泉として扱い、神話に登場する神々の名前から出発して興味深い語源的分析を行った。N.マツォキンは、A.コントの著作など社会学的研究にも詳しく、社会学はヨーロッパ中心主義を超えるために極東諸民族の社会を研究すべきだと主張[83]、また日本における民俗学研究にも注目し、東京人類学協会の著作を翻訳した[84]。言語学の分野では、1926年に「当時の理論言語学の立場から日本語に取り組む最初の試みであった」[85] 日本語の動詞の形態論に関する研究を著

79）Мендрин В.М. Сёгун и сэйитайсёгун. Бакуфу. Лингвистические и исторические очерки. С приложением хронологического перечня сёгунов и двух алфавитных указателей// Известия Восточного института. Т. LXI. Владивосток, 1916. С. 1-198.

80）Мендрин В.М. История сёгуната в Японии. Нихон гайси（日本外史）. Рай Дзё. Сисэй（頼襄子成）. Перевод с японского с примечаниями и комментариями. Книга VI. Нитта（新田）// Известия Восточного института. Т. LX. Владивосток, 1915. С. 91-173.

81）Мацокин Н. Материнская филиация в восточной и центральной Азии. Вып. 1. Материнская филиация у китайцев, корейцев и японцев// Известия Восточного института. Т. XXXIII. Вып. 1. Владивосток, 1910; Мацокин Н. Материнская филиация в восточной и центральной Азии. Вып. 2. Материнская филиация у тибетцев, монголов, мяоцзы, лоло и тай // Известия Восточного института. Т. XXXIV. Вып. 2. Владивосток, 1911.

82）Мацокин Н.П. Японский миф об удалении богини Аматэрасу в небесный грот и солнечная магия // Известия Вост. Факультета Гос. Дальневост. ун-та. Т. 66. Вып. 3. Владивосток, 1921.

83）Мацокин Н. О социологии и востоковедении // Вестник Азии. Харбин, 1914. № 30. С. 36-39.

84）Мацокин Н. К этнографии острова Формозы (перевод с японского) // Вестник Азии. Харбин, 1914. № 31-32. С. 50-56.

85）ウラジーミル・ミハイロヴィッチ・アルパートフ『ロシア・ソビエトにおける日本語研究』東海道大学出版会、東京1992.　P. 74.

している[86)]。

「日本人論」のテーマを開拓した論文として、A.ペトローフの「現代日本の社会生活概要」[87)]とP.ヴァスケーヴィッチの「日本の学校」[88)]（1912）を挙げよう。

東洋学院の学生が国費で日本へ派遣される際、日本語学習以外に研究課題が与えられた。その結果提出された研究課題の中では、日本の商業・産業活動に焦点を当て、公式資料の翻訳に基づくものが多い。典型的な例として、A.コーベレフの「1901年の函館市およびその通産活動概観（日本語資料による）」[89)] を挙げておこう。東洋学院のカリキュラムにより、１～２学年では西洋文献の翻訳が、３～４学年では文学作品を含む日本語文献の翻訳が課されていた。例えば1911年には、日本への夏季研修の結果、次のような翻訳が提出された。M. マルィセフ(Марусев)「日本人の商業倫理について」、N.マツォキン(Мацокин)「『人類学会雑誌』からの翻訳による、フォルモーサ島の人類学について」、M.ソロヴョーフ(Соловьев)「現代韓国事情（『韓国総覧』『朝鮮要覧』『朝鮮一斑』『産業政策』などの翻訳による）」、ドラウーリ(Драуль)二等大尉「日本の文献における夜間演習実施について」、ムサートフ(Мусатов)陸軍中尉「『その一戦』－水野廣徳による津島作戦の記述の翻訳－」、オトツキー (Отоцкий)大尉「小松原文部大臣による日本教育見解」、ポポフ(Попов)陸軍中尉「森田草平の小説『煤煤』の翻訳」などである[90)]。

日本でのフィールドワークに基づいた提出課題もある。その中で特に有名なのは、P.ヴァスケーヴィチによる前述の『敦賀新潟間日本旅行日記』である。P.ヴァスケーヴィチは1902年の５～８月に、敦賀、福井、金沢、高岡、富山、新潟などの日本海側の市町村を訪れ、当地域の農産商業や漁業、名所旧跡、歴史的出来事を記述し、目的地の町の地図まで調べて旅行記として発表した。『東洋学院通報』の第４～10巻に載せられた（付録を含めて約500ページに及ぶ）この詳細な旅行記からは、当地域のインフラ整備の状態、地域行政、交通、各種経済活動、教育・文化活動、外国人に対する態度など、20世紀初頭における日本の地方社会の様子を詳しく伺い知ることができる。P.ヴァスケーヴィチは東洋学院の３回生であったにもかかわらず、日本海地域には欧米人の来訪がほとんどなかったために、県や市町村の行政責任者や各種企業家、教育機関長と対面することができ、また現地の実業家からは各種のプロジェクトについて相談も寄せられた。彼の発言がそのまま現地の新聞に掲載されることもあったという[91)]。地方の大衆文化の発達に関わる記述には、興味深いもの

86）Мацокин Н. Очерк морфологии настоящего времени японского языка. Владивосток, 1926.

87）Петров А. Очерки социального быта современной Японии // Известия Восточного института. Т. XV. Вып. 6. Владивосток, 1907. С. 1-40.

88）Васкевич П. Японская школа // Вестник Азии. Харбин, 1912. № 11-12. С. 265-276.

89）Обзор города Хакодате и его торгово-промышленной деятельности в 1901 году (по японским источникам) – студента Ⅲкурса Восточного института А.Кобелева // Известия Восточного института. Т. XII. Владивосток, 1904. С. 1-59.

90）Приложения к «Протоколам заседания Конференции Восточного института за 1911-1912 год» // Протоколы заседаний Конференции Восточного института за 1911-1912 акад. год // Известия Восточного института. 1911-1912 акад. год. Приложение 2-е. Владивосток, 1914. С. 3-4.

91）Дневник поездки в Японию от порта Цуруга до порта Ниигата. Студента Ⅲ курса Павла Васкевича // Известия Восточного института. Т. Ⅳ. Владивосток, 1903. С. 237.

もある。たとえば次の記述を見てみよう。「当日の夜、僕のところに集まってきたお客さんと一緒に女性力士の試合を見に行った。劇場もしくはサーカスは手狭で汚く座席がなく、急ごしらえで建てられた仮小屋のようなものであった。それにしても、お客さんは多かった。…劇団は重量上げを争い、最終的に体力競争をするのは女性ばかりであった。…」[92]。後にヴァスケーヴィチはアムール州における日本人居留民（日本ディアスポラ）研究も開始し、ロシアにおける日本移民研究の端緒を開いた[93]。

以上のように、東洋学院の学生と聴講生の努力により、民族誌的データや露日通商関係発達に必要なデータが集められた。東洋学院の研究者は、西洋の日本学にならって「日本人論」的研究も行ったものの、学問と実践との結びつきをより重視する傾向があった。その結果、日本でのフィールドワークの展開、ロシア極東における日本居留民、すなわち日本人の世界移動の研究、日本の研究者の著作の紹介とそのメタ言語の研究などが発達し、日本学における新しいアプローチを実現することができた。N.V.キューネル、E.G.スパルヴィン、D.M.ポズドネエフ、N.マツォキン、P.ヴァスケーヴィッチ、L.ボゴスロフスキーその他の東洋学院の教員、学生、聴講生、卒業生の努力により、ロシアにおける現代日本学の土台が作り上げられたのである。

Ⅴ．東洋学院後（結語に代えて）

1922年10月25日にウラジオストクにソビエト政権が樹立された。その後ソ連極東における大学教育は、ソビエト政府の決定によって再編成を繰り返されることになった。1923年に国立極東大学は師範大学および工業大学と統合された。国立極東大学設立以来、東洋学部の学部長であったE.G.スパルヴィンは、V.I.オゴロードニコフ新学長により学部長のポストから退けられた。しかし彼は同年、全露東洋学者協会極東支部がウラジオストクで出版し始めた会報『新東洋学』（Новое востоковедение）の編集長になり、1924年からは東洋学部が刊行し始めた紀要『東洋スタディオ』(Восточная студия)の創刊や編集に加わった。

ソビエト政権の一貫性のない大学教育政策にも拘らず、国立極東大学では東洋学院の卒業生であったN.P.オヴィディエフ、K.A.ハールンスキー、Z.N.マトヴェエフ、T.S.ユルケーヴィチなど、ウラジオストク実践的東洋学派の新世代研究者たちが活躍した。1932年から1937年まで日本語講座主任であったN.P.オヴィディエフは、日本語教材作成のほか、ロシアで初めて日本における言語状況を分析した[94]。K.A.ハールンスキーは1917年から1930年のあいだに、沿海地方の新聞『赤旗』に150点ほどの日本・中国関連記事を書いており、その内容は経済政治事情、労働運動、国際政治や1925-1927年中国内戦などに及んでいる[95]。また1926年には、日本の地理や歴史を概観し、政治や経済を初め宗教、憲法、植民

92）同上、p. 39.
93）Васкевич П. Очерк быта японцев в Приамурском крае // Известия Восточного института. 1905-1906 акад. год. Т. XV. Вып. 1. Владивосток, 1906. С. 1-25.
94）Овидиев Н.П. Современное состояние современного японского литературного языка // Труды Дальневосточного гос. ун-та. 1926. Сер. VI. №3. С. 1-13.

地、労働運動など、当時の日本社会の様々な側面を記述する百科事典的著書、『過去と現在における日本』[96] を世に出した。T.S.ユルケーヴィチは1923年に、前述の『初心者向け口語日本語学習教材』を執筆し、1925年には『現代日本：イラストや地図を含む日本の最新の資料に基づく経済・地理概要』[97] を出版した。この本にはスパルヴィンとキューネルによる書評が載っており、日本人研究者の資料を参照する東洋学院の伝統が生かされている。国立極東大学（後に極東国立工業大学）の図書館長であったZ.N.マトヴェエフには、日本関連著作のほか、書誌学的な論文が多かった[98]。

1929年、極東国立大学は一時閉鎖され、その代わりに1930年の3月に工業大学、農業大学が新たに設立された。この措置を受けて、中国語科と日本語科のあった東洋学部は、ハバロフスクの国民経済大学に一時編入されたが、1931年6月13日に国立極東大学が再開されると、東洋学部もその管轄下に戻された。しかし1939年に、ソ連邦内務人民委員部によって「国立極東大学に存在していた、極東における右翼トロツキー派陰謀に加わった反革命的スパイ妨害組織」[99] が「発見」されると、ソ連邦最高裁判所軍事参与会出張裁判の決定により、Z.N.マトヴェエフ、N.P.オヴィディエフ、K.A.ハールヌスキー、K.P.フォークリンなど、東洋学部の主要日本学者たちが日本の「スパイ、妨害行為者」[100] として逮捕され、射殺された。この粛清事件によって壊滅的な打撃をうけた国立極東大学は、事件後「敵とスパイの巣」として再び閉鎖された。このように、スターリニズムのテロ政策により、ウラジオストクの実践的東洋学派に終止符が打たれたのである[101]。

1956年、ウラジオストクで極東国立総合大学が再び開設されると、1962年には日本語科と中国語科を含む東洋語講座が作られた。東洋語講座は専門家不足を乗り越えつつ発展し、1970年には東洋学部が再興された。ソ連崩壊後の1994年、東洋学部は「極東国立大学東洋学院」と改名され、帝政時代の実践的東洋学の学術雑誌『東洋学院通報』も復活した。現在、極東国立大学東洋学院には中国学部、日本学部、朝鮮カレッジ、南東アジア諸国学部があり、日本学部では、主に日本史や文化を研究する日本事情講座と、言語文学講座、このほかアジア太平洋地域経済金融講座、東アジア対外政策及び国際関係講座、英語講座、東洋

95）K.A.ハールンスキーの活躍と運命については、以下を参照。Серов В.М. Китай и Япония в публикациях Харнского // Историография и источниковедение стран Дальнего Востока. Серия Востоковедения. Вып. 2. Межвузовский тематический сборник. Владивосток, 1979. С. 6-29. Бондаренко Е.Ю. Журналист, ученый, педагог (Константин Андреевич Харнский) // История ДВ России в лицах. Забытые имена. Вып. 1. С. 166-180.

96）Харнский К.А. Япония в прошлом и настоящем. Владивосток, 1926.

97）Юркевич Т.С. Современная Япония: Экономическо-географический обзор по новейшим японским источникам с иллюстрациями и картами. М.: Госуд. воен. изд., 1925.

98）Матвеев З.Н., Попов А.Д. Библиография Японии / Под ред. Е.Г. Спальвина. Владивосток, 1923; Библиография по истории интервенции на русском Дальнем Востоке // Известия приморского архивного бюро. Владивосток, 1924. Вып. 2. С. 217-228など。

99）Донской В.К.. Разгром восточного факультета ДВГУ // http://www.ihst.ru/projects/sohist/papers/dvran/1996/1/95-108.pdf

100）История Дальневосточного Государственного университета в документах и материалах 1899-1939. Владивосток. 1999. С. 574.

101）以下のWebサイトでも迫害された日本学者のデータを見ることができるhttp://www.ihst.ru/projects/sohist/papers/dvran/1996/1/95-108.pdf; ORIENTALICA; http://www.forum.orientalica.com/index.php?act=Print&client=printer&f=95&t=1875

語学講座が共通教育を行っている。2008－2009年度には、極東国立大学東洋学院の教員数は114人、学生総数は869人である。このうち日本学部には教員24人、日本人講師3人、学生217人が在籍している。極東国立大学東洋学院は、モスクワ大学、サンクトペテルブルグ大学と並び、ロシアにおける重要な日本研究教育センターの一つとなっている。